

りしを町地となしける故に、河原町といひしを、河筋に添うて堅町になしたるにより、堅河原町とは呼びたりしを、後には略稱して堅町・新堅町とは呼べり。新堅町名願寺の由来書に、文祿元年金澤河原町に於て寺建立仕。と見れば、堅町・新堅町も本名は河原町と呼びたりしと聞ゆ。但し文祿元年の頃は此の地未だ町地にあらず。文祿は元和・寛永などの過聞なるべし。河原町の來歴は河原町の條にも記載す。

○中河原郷

元祿三年三月古寺町福藏院空膳が筆記せし小橋天神由来書に、當社天満天神、往古當國河北郡吉倉村に御鎮座之處、四代以前別當道安鑑夢を蒙り、香林坊小橋之爪河原に奉遷處、近郷河原に而僅に家居十軒許有之處、追々家相建候付、春秋に祭禮之儀式を成し、元來當社氏子地と申すは、香林坊の小橋より才川橋、古寺町近郷は、往古河原にて、五ヶ之庄・富樫之庄・石浦之庄、右三ヶ所之出合之河原に而有之故、當院より中河原之郷与唱へ、産子繁榮之祈禱札相配り、氏子繁昌を祈念仕。と載せたり。按ずるに、中河原

といふ事は既に引證せし如く、三壺記寛永八年の條に、犀川橋爪法船寺の門前より出火、中河原の大橋を燒落す。と見れば、貞享二年卯辰妙應寺由来書に、犀川中河原に於て寺地拜領之處、町屋敷に被仰付由に而被召上。とあり。或は云ふ。中河原といふは、今の片町・河南町の地邊に而、そのかみ此の地邊犀川二瀬に流れたる中嶋なりし故に、世人中河原と呼べり。此の地後に町地と成りて、町名を立て、中河原町と呼べりといへり。

○木倉屋長右衛門傳

木倉屋は世々長右衛門と稱し、鬢附油を製す。世人木倉屋の鬢附と稱し名産とす。家傳に云ふ。四代目の長右衛門迄は無商業なりしかど、朝暮商業の術を工夫し、何卒能き商業にあり付きたしと、田井天満宮へ祈願する處、或夜夢想の神託を蒙りて、初めて鬢附油を製造す。故に其の名を梅がえと號せり。然るに年を逐うて商店繁榮を得、天和元年より藩侯の御櫛筒用、および廣式向の御用も命ぜられたり。但しそのはじめ何れの町地に居たりけん承傳無之、河南町へ轉宅せしは享保六年なりとぞ。同十二年に四代長右

衛門商業を五代長右衛門に譲り、元文元年九月十五日四代長右衛門歿せりと。夫れより後代々河南町に居住し、商業を世々營みしかど、明治廢藩置縣の際稍、零落し、明治十四年家・商業を他人へ譲り退去せりといへども、其の後木倉屋の別家同町に家屋を求め、更に鬢附店を開きけるが、其の後往昔よりの舊邸をば買戻し、再び元の如く鬢附店をひらき、今に至り繁昌の家名を復古せり。

○龜田伊右衛門傳

屋號を宮竹屋と稱し、俗名は世々伊右衛門と稱し、藥店を商業となし、殊に此の龜田伊右衛門と堤町の中屋彦右衛門は、金澤市中にて藥店の本家とす。萬病圓烏犀圓は、此の兩家にのみ調合する秘方なり。且兩家共舊藩中は金澤町年寄を勤むる家柄にて、殊に世々繁昌して、于今家勢を落さず。元祿頃の宮竹屋主人は、俳名を小春と稱し、芭蕉の門人なり。俳家小傳にも、小春は金澤人、龜田氏。と載せたり。又俳林小傳には、小春加賀金澤人。住長屋町。通稱宮竹屋伊右衛門。藥店也。と記載すれど、長屋町といへるは河南町の過聞なるべし。句空の草庵集に、小春の句を擧げ

たり。また其の後孫にては龜田商齋と呼べる人、風雅の一畸人とす。津田鳳卿が龜田商齋八十賀壽序に云ふ。

始余成童。見屋山林先生于國賢。先生爲人。聰敏博雅。循々善誘人。吾亦數侍絳帷。既知仲子商齋。商齋出嗣龜田鐵齋裔。至今爲庶爲盛族。資性溫籍好客。聞人之至於斯也。未嘗不得見也。交遊日博。以屋山翁仲子也。爾後可四十年。吾又遇叟于渡邊禪園家。叟益加。容貌言笑不異舊時。歲餘余招賀茂縣主直兄于草廬。叟亦來與。其講。自是有時訪吾廬。共話舊事。今茲甲辰齡昇八秩。子姪相集。舉觴上壽。嘉賓滿室。文人墨客皆有賀章。壽筵甚盛。屢調余題。其首簡余之於叟相識殆五十年。不啻一日之雅也。舊交相尋往。叟獨安在。聞恒服金澤君府事不懈。間賦倭歌及詩。耆老能事如此。亦不易獲也。古語云。愛其人則及屋上烏。况叟爲屋山翁仲子。吾雖老病久不接筆。敢愼然無言而止。竊聞叟自壽國風升聞於雲上。金谷後宮特下內旨。錫彈正君閑院愛仁親王詠藻。左衛門督冷泉爲全卿詠草及黃金。國母仙院又賜灑金三套杯及黃金。蓋以隣其高年而解國風也。竊從亦有所惠。可謂獲天幸世希其比也。昭代文明之澤下及庶